

学位請求論文の内容の要旨

| | |
|---|--|
| 論文提出者氏名 | 腫瘍制御科学領域泌尿器腫瘍学教育研究分野 氏名 城戸 宏一 (きど こういち) |
| <p>(論文題目)</p> <p>Sleep Disturbance Has a Higher Impact on General and Mental Quality of Life Reduction than Nocturia: Results from the Community Health Survey in Japan (睡眠障害は夜間頻尿よりも一般的 QOL および精神的 QOL に強く影響を及ぼす)</p> | |
| <p>(内容の要旨)</p> <p>背景：夜間頻尿の頻度は加齢とともに上昇し、不健康な状態を引き起こし、QOL 低下を招く泌尿器系症状のひとつである。長い間、夜間頻尿や睡眠障害は QOL 低下と密接に関連するとされてきたが、どのドメインの QOL に悪影響を与えるのかは明らかにはなっていなかった。さらに、夜間頻尿と睡眠障害のどちらがより強力に QOL に悪影響を及ぼすのかも不明であった。</p> <p>目的：夜間頻尿と睡眠障害が各々どのドメインの QOL にどれほどの影響及ぼすのかを比較検討することを目的とした。</p> <p>対象と方法：2011 年から 2015 年の間に岩木健康増進プロジェクトに参加した男性 1529 名、女性 2463 名、計 3992 名を対象とした。睡眠障害は PSQI (ピッツバーグ睡眠指数)、男性の下部尿路症状は IPSS (国際前立腺肥大症症状スコア)、女性の下部尿路症状は OABSS (過活動膀胱症状スコア) を用いて評価した。PSQI で 6 点以上の場合、睡眠障害ありと定義した。QOL は SF-36 を用いて評価した。臨床データの統計解析は SPSS, version 24.0、GraphPad Prism 5.03 および R 3.3.2 を使用した。カテゴリー変数の比較は Fisher's exact もしくは chi-square test を使用し、正規分布の群間比較は Student <i>t</i> test、非正規分布の群間比較は Mann-Whitney <i>U</i> test を使用した。2 群間の相関関係は Spearman's correlation coefficient を用い、<i>p</i> values <0.05 の場合に統計学的に有意差ありと判定した。SF-36 低下率が 30%を超える場合を有意な QOL 低下と定義し、夜間頻尿と睡眠障害が 30%を超える QOL 低下に与える影響について univariate-logistic regression analysis を用いて評価した。さらに、inverse probability of treatment weighting (IPTW)-adjusted logistic regression analysis を用いて 30%を超える QOL 低下率をきたす因子に関する検討を行った。</p> <p>結果：3992 人の参加者のうち、男性 1529 人、女性 2463 人でうち 632 人 (全体の 16%) に睡眠障害を認めた。夜間頻尿の頻度は PSQI score と有意に関連していた。QOL ドメインのうち睡眠障害と夜間頻尿の両方が身体的 QOL と有意に関連していたが、夜間頻尿、一般的 QOL と精神的 QOL には関連していなかった。multivariate-logistic regression analysis では、夜間頻尿は、30%を超える一般的 QOL および精神的 QOL とは関連していなかった。一方で、睡眠障害は、全てのドメインの QOL 低下と有意に関連していた。今回は横断研究のため夜間頻尿と睡眠障害の因果関係を評価できなかったところに limitation があった。</p> <p>結論：本研究によって、睡眠障害は一般的 QOL と精神的 QOL に対しては夜間頻尿よりも大きな影響があり、身体的 QOL に対して両者は同等の影響力があることが示唆された。</p> | |